# 令和７年度８０２０公募研究事業
# 研究報告書抄録（採択番号 25-1-03）

研究課題：児童相談所の一時保護児における口腔内状況と虐待分類との関連性の定量化・可視化

研究者名：許　以寧[1)]、水本　憲治[1)]、森岡　俊介[2,3)]

所属：1)京都大学大学院総合生存学館、2)森岡歯科医院、3)東京都歯科医師会

【背景】

児童虐待の早期発見と支援計画立案には、急性期の身体所見だけでなく、養育環境を長期的に反映しうる客観的情報の活用が求められる。口腔健康、とくに未処置う蝕や治療完了状況は、日常的ケア、受診継続、養育者による健康管理の影響を受けるため、虐待・ネグレクトの補助的評価指標となる可能性がある。本研究では、一時保護所に入所した子どもを対象に、口腔健康状態と虐待類型との関連を定量的に検討した。

【方法】

本研究は、2016 年 10 月から 2024 年 3 月までに実施された月例歯科健診記録を用いた後ろ向き横断研究である。対象は、虐待が疑われ一時保護された 2〜17 歳の子ども 1,235 名とした。虐待類型は身体的虐待、ネグレクト、心理的虐待、性的虐待の 4 群とし、歯科指標として総う蝕経験、未処置う蝕歯数、健全歯率、ケア指数、歯肉炎、歯科治療必要性等を算出した。群間比較には $\chi^2$ 検定および Kruskal-Wallis 検定を用い、さらに年齢・性別で調整したロジスティック回帰分析により、身体的虐待群を基準とした各虐待類型の調整オッズ比を推定した。

【結果】

解析対象者の虐待類型は、身体的虐待 646 名（52.3%）、ネグレクト 328 名（26.6%）、心理的虐待 201 名（16.3%）、性的虐待 60 名（4.9%）であった。総う蝕経験は群間で有意に異なり、ネグレクト群で最も高かった（2.43±3.79）。未処置う蝕歯数もネグレクト群で高く（1.73±3.29）、身体的虐待群および心理的虐待群のおよそ 3 倍であった。ネグレクト群では健全歯率が最も低く（87.2±19.0%）、う蝕経験を有する子どもに限定したケア指数も低値であった（35.7±40.0%）。歯科治療必要性はネグレクト群で最も高く、38.7%に認められた。歯列期別では、虐待類型とう蝕負担との関連は混合歯列期で最も明瞭であった。多変量解析では、身体的虐待群と比較してネグレクト群は、う蝕経験あり（aOR=1.72, 95%CI: 1.28-2.31）、未処置う蝕あり（aOR=1.99, 95%CI: 1.46-2.72）、歯科治療必要性あり（aOR=2.05, 95%CI: 1.51-2.79）のオッズが有意に高かった。

【結論】

本研究により、一時保護児の中でもネグレクト群は、他の虐待類型と比較して、う蝕負担、未処置疾患、治療未完了、歯科治療必要性が一貫して高いことが示された。これらの所見は、口腔健康状態がネグレクトの診断根拠そのものではなく、持続する未充足の健康ニーズや受診継続上の障壁を把握する補助的情報となりうることを示唆する。特に混合歯列期、すなわち学童期に相当する段階で差が明瞭であった点は、学校歯科健診や一時保護受け入れ時の歯科評価を、児童福祉、医療、歯科保健の連携に接続する意義を支持する。今後は、非虐待対照群との比較、社会経済的要因や過去の受療状況の把握、縦断的追跡により、口腔健康指標を支援計画に活用するための実証基盤をさらに精緻化する必要がある。